

福江島：石の文化

モルタルなどの結合材を使わずに造られた石の壁を「石垣（いしがき）」と呼ぶ。この言葉は、城のそびえ立つ壁や土台に適用されることが多く、実際、福江で最も優れた例の中には城壁も含まれている。石垣は島のほぼ全域で見られ、滑らかに切り出された壁から、野面石を荒々しく積み重ねたものまで様々である。福江には火山石が豊富にあるため、藩主から農民まで、あらゆる階層の住民にとって重要な建築材料となっており、その利用はこの島の環境における生活の中心となっている。

福江城と富江石蔵

現存する 19 世紀の福江城の城壁と 18 世紀の富江石蔵は、おそらく福江で最高の石垣の例だろう。硬い玄武岩を丹念に切り出し、石と石が均等に組み合わせられ、滑らかな外面を呈している。どちらも当時の領主の注文によるもので、領主は専門の石工を雇う余裕があった。数世紀を経て、木造の屋根、扉、床は姿を消した。しかし、風雨や蔓の蔓延によって徐々に劣化しているにもかかわらず、石垣は今もしっかりと立っている。

武家屋敷通り

福江城からほど近い場所に、17 世紀の城下町福江の姿を今に伝える中級武家屋敷通りがある。この通りは約 400 メートルにわたって続き、それぞれの屋敷を囲むように石垣が並んでいる。建物自体は後世の再建や改築だが、石垣はほぼオリジナルのもので、全国でもほとんど他では見られない「こぼれ石」と呼ばれる丸石を積み上げている珍しい特徴がある。この不安定なバランスで積み上げられた石は、防御のためのものだったという説が有力だ。相手が夜間に城壁を乗り越えて忍び寄ろうとした場合、石が落ちる音で住民を奮い立たせることができたのだ。門の両脇には、福江石垣のもうひとつの特徴である半円の形をした括り石が残されている。これは、温かいそばやうどんの上ののっているかまぼこに似ていることから、親しみを込めてかまぼこ石と呼ばれている。

円畑

福江市郊外の石垣は、玄武岩を細かく切り出したものから、多孔質の溶岩でできた荒々しいものへと変化している。素材が変わることで、プロが依頼を受けて建てた建造物と、農家が自分の手で近くの土から石を引き出して建てた荒壁とが、視覚的に区別される。古い農家の塀、防風林、トタン屋根の小屋、農産物を干すための小屋でさえ、この穴のあいた黒い石で作られている。また、三井楽半島では、円畑と呼ばれる特徴的な円い畑の周囲に塀を築くのに溶岩石が使われてきた。他の地域では、畑は簡単に耕せる正方形や長方形が一般的だが、三井楽では、農家は溶岩台地のなだらかな丸みを帯びた段々畑と、その段々畑が作る自然に曲がりくねった水の流れに沿って畑を形作った。溶岩の壁が田畑を囲み、土壌の浸食を防ぐと同時に余分な水を逃がす。稲の生育には常時水が必要なため、これらの畑では一般的にサツマイモ、むぎ、大豆が栽培されている。

勘次ヶ城

富江半島の南海岸に、「勘次ヶ城」あるいは「山崎の石塁」と呼ばれる、もうひとつの不思議な石垣がある。迷路のような海辺の砦跡が緑の中から顔を覗かせ、荒々しく形成された玄武岩の城壁が約180メートルにわたって続いている。砦の正確な起源は謎に包まれている。しかし、かつて海賊の隠れ家であったことを示唆する要素は多い。まず、岩礁に守られた人里離れた場所にありながら、外洋に出られること。次に、砦の入り口はひとつしかなく、壁にはのぞき穴が点在していた。遺跡から出土した明代の貨幣、陶器の破片、人骨などがこの説を裏付けている。もうひとつの説は、地元の民話に由来するもので、河童の助けを借りて勘次という名の大工が建てたというものだ。